建設省、国土交通省、
―耐え難いが気楽な拘束―
寧ろ支配されること、破壊されることを期待して

最初に受注した建設省の設計業務は中部通商産業局総合庁舎改造で、それは１９９４年である。１９７２年創業のPESとして既に２２年を過ぎてのことであった。それまでの２０数年余は民間企業から、或いは地方自治体からも特命で、設計、コンサルティングの両面での業務を受注していた。設計の時から設計完了後、建物が完成される迄の時間を緊張の中で過ごし、竣工時の喜びをお施主様と共に味わうことが生き甲斐になっていた。そこには発注者の将来への希望や夢を実際の形として、その実現に寄与できた満足感が湧いていた。最低の価格で落札して、受注後は、とかく定められた設計基準通りに仕事を進めるという規制になりがちな設計手法に、なじめず、入札指名を求めていなかった。アメリカの設計事務所で得られた体験が帰国後のPESの運営にも強く影響していた。Syska Hennessyでは、正式採用されるとエンジニアには「Design Guide」というリングで綴じられた厚い冊子が貸与される。それには会社の考え方、社員の守るべきルールが示されており、その上で、技術的な設計指針や規準が具体的に書かれていた。２年の勤務後、退職で「Design Guide」返却の折、この利用方法、コピーライト（著作権）を尋ねたら、この中の内容は6カ月毎にリヴァイス（見直し、修正）されるので、自由に使用して良いとの判断を得た。

それは、2週間の事前通知（2Weeks Notice)で、50人が解雇され、新たに20人が採用されるという実例として見た会社組織の日々の流動性と同じように「日進月歩」の建築設備の技術革新に対応するものであった。就職先のSyska＆Hennessy社は、当時既に40年の歴史を持って存在してきており精神的な支柱の一つがそこにあったと回顧する。この経験から規準、規制で設計に臨む官庁物件に魅力を感じなかったのは率直な感想である。ひたすらに設計規準に準拠し、メーカー資料を参考に設計する技術者はイエスマン、カタログエンジニアと呼ばれて評価されないアメリカの世界での考え方の影響はPESの受注姿勢の根底にあったのは否めない。１９９０年代後半から地球環境に良い建物を設計する考え方が公的機関で検討されるにつれてPESも徐々に、入札参加する方針に変更して来た。特に「グリーンビルディング」の実現を目指す立場で、１９９７年から5回に亘り、アメリカのから講師を招き、全国でのセミナ開催し、アメリカの実例を紹介し、グリーン建築を主導する立場で、積極に建設省の業務の受託を試みた。結果、２００２年刈谷地方合同庁舎新築の設備設計でグリーン庁舎の実現に参画できた。その後、２００３年から２００９年にかけて、愛知、三重、岐阜、静岡の各県の庁舎のグリーン化技術検査及び検証の業務を受注した。

刈谷地方合同庁舎

刈谷地方合同庁舎